

鈴木七美・藤原久仁子・岩佐光広 編著

## 『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』

『出産の歴史人類学』『癒しの歴史人類学』などの保健医療の歴史人類学的研究で知られる鈴木七美氏を中心として、教育や宗教、医療などの多領域の歴史人類学を専攻する研究者が高齢者のライフスタイルを中心とした今日的な「ケア」の問題を広く論じたのが本書である。とはいえ、いずれの著者も歴史的研究については、「腕に覚えのある」強者であるから、多くが明示的あるいは暗示的に歴史へのまなざしにもとづく分析が盛り込まれていることは言うまでもない。

本評では、多彩な著者による多くの論考を紹介しながら、ケアの今日的な問題に共通する歴史的な基盤を探ることにしたい。

第1章の鈴木七美「ケアする」は、「はじめに一ウェルビーイングと時のデザイナー」「第1節 人生区分の思想」「第2節 高齢者に適的な産業創出とケアの展開」「第3節 往來の地における余暇の発見」「おわりに 一余暇の共有と関わりとしてのケア」からなる本書の基調ともなる論考である。人生のライフステージの中での「ケア」のあり方を種々のケアの文化的諸相において鳥瞰しながら、高齢期におけるケアの「互換性」を四国のとある町の料理に添える「葉」を生産している場面を通して、高齢者の生産主体としての側面とそこでの生活のあり方、そしてそこに「循環的共生」と「協働としてのケア」という本書を通じる一つの概念を紡ぎ出していく。

第2章の寺崎弘昭「生を養う ウェルビーイングの射程」は、「はじめに」「第1節 ウェルビーイングと福祉」「第2節 生を養う—教育の目的—」「第3節 養生のコスモロジー—「心地よい生」の希求」「第4節 養生の時空 スコアレとウェルビーイング」からなる。寺崎は教育の歴史人類学の視角からウェルフェアのポリスの性格を指摘しながら、「よく生きる」ことのあり方をウェルビーイングとしての養生に仮託しながら、そこ

に生涯にわたる教育と学びの根源的ありようをみる。

第3章の白水浩信「寄り添う—福祉・教育の複合施設「楚洲あさひの丘」」は、「第1節 廃校から多機能複合施設へ」「第2節 高齢者と子どもが寄り添う場」「第3節 共同店—もうひとつのウェルビーイング」「おわりに—学校の思い出をこえて」からなり、沖縄県国頭村にある廃校となる学校をデイサービスセンター、生活支援ハウス、保育所等からなる多機能型の複合福祉施設をつくる動きとそこでの関わる人々の交流と思いを綴りながら、学校や福祉に関わる見方の多面性をイリイチの思想を差しはさみつつ検討している。

第4章の谷口陽子「つなぐ—災害復興地における地域社会づくりの取り組み」は、「はじめに」「第1節 長岡市山古志地域の概況」「第2節 全村避難から避難所での生活」「第3節 「帰村」からその後の生活」「第4節 考察—経験をつなぐ」からなり、中越地震の被災地の復興過程における高齢者のケアとそれを軸とした地域のネットワーク形成のあり方を描写している。

第5章の傳法清「広げる—日系高齢者施設のアウトリーチ」、第6章の山田千香子「夢みる—バンクーバーにおける移住高齢者の生活とコミュニティ」、第7章の遠藤秀樹「旅する—ウェルビーイングにおける「遊び」の重要性」、第8章の金本伊津子「探る—ブラジル日系高齢者のアイデンティティとウェルビーイング」、第9章の編者のひとりである岩佐光広「深める—「良い死」の外側へ」の各章は、それぞれカナダのトロント、バンクーバー、米国のオーランド、ブラジル、そしてラオスと、世界各地の高齢者ケアの実践例を取り上げながら、高齢者や時には子どもや障害者の生き方とウェルビーイングの様相を描き出している。詳細を紹介したいところであるが紙幅の関係

で割愛せざるを得ない。是非とも本書で、世界の多様なケアの方略を玩味していただきたい。

第10章の編者でもある藤原久仁子「巡る一岡山県井原市「嫁いらず観音院」に託する高齢者の想い」は、「はじめに」「第1節 現代社会と「ぼっくり」信仰」「第2節 「嫁」はだれか」「第3節 下着の祈祷」「第4節 考察」「おわりに」からなり、現代日本にも根強く残る「ぼっくり信仰」の生態をみながら、高齢者がケアを受けることへの複雑な思いと自立したウェルビーイングへの願いの実相に迫っている。

そして、再び鈴木の本第11章「渡る一世界や宇宙と響き合う物語へ」は、カナダを舞台とした高齢者の住空間とそこでの文化的交流の姿からノーマライゼーションとウェルビーイングの実体化としてのライフケア・コミュニティのあり方を

すべての人々を養うマクロコスモスとしてとらえている。

本書の各章を貫く基本的な理念はウェルビーイングとその実体化としての「養生」である。すべての論考に歴史的観点かむき出しになっているわけではないが、高齢者のケアという視座から人間が生まれ、生き、そして死に旅立つ全過程のそれぞれの場面に、歴史を背負って、それを乗り越える生き方を、楽しみながら求めていく、それこそが「養生」であることを雄弁に説いている論集といえよう。

(瀧澤 利行)

〔御茶の水書房、〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20, TEL. 03 (5684) 0751, 2010年10月, A5判, 188頁, 2,400円+税〕

小田泰子 著

## 『スペイン風邪流行とその時代 ——東北地方と第二師団での流行を中心に——』

インフルエンザの流行に対して、抗ウイルス薬や予防接種以外の介入、すなわち、検疫、隔離、学校閉鎖、集会の禁止などの公衆衛生的介入が近年重視されている。特に、1918-20年パンデミック（いわゆる“スペインかぜ”）に際して米国でこれらの方策が有効だったことが示されており、われわれにとって貴重な教訓となっている。

本書は、表題のとおり“スペインかぜ”流行とその時代背景について、当時の新聞雑誌記事160件以上の内容を羅列的に紹介し、2009年の“新型インフルエンザ”の流行と引き比べて解説を試みたものであり、その意図は時宜に適ったものといえよう。構成は、第一章と第二章が大正時代と第一次世界大戦に関する概説、第三章から第六章が「我が国におけるスペイン風邪流行」の記述、第七章はスペイン風邪で死亡した著名人、最後の第八章がスペイン風邪ウイルスの探索の歴史、である。紹介されている記事の大半は河北新報のもの

で、140件以上ある。他には、読売新聞、東京日日新聞、東京朝日新聞、時事夕刊、時事新報、大阪毎日といった新聞と東京医事新誌などの記事が記述されている。記事の内容は、軍隊での流行、学校での流行や休校の様子、東北帝大教授の談話など、多岐にわたっている。

特に、学校における休校の記事が多いことが興味深い。当時の内務省衛生局の報告書である「流行性感冒」では、岩手県、宮城県とも数校あるいは20数校が休校した事実を簡単に記載している程度であり、本書に記述されている河北新報の記事からは、実際には休校はもっと大規模であったことが知られる。

その他にも、本書には各記事における各地区、学校、軍隊などのその時々の罹患者、死亡者が詳細に記述されている。これらの情報は、行政側では失われているものが多いと考えられるので、実際に新聞にあたって調査する際の導入という意味